

万博探鳥会の鳥 05年1月～3月



(オシドリ)

1. 万博公園探鳥会05年1～3月の結果……2
2. 01年～05年1～3月の結果比較 ……3
3. 01年～05年冬鳥の状況 ……4
4. 木の実(液果)と鳥の関係 ……7
5. 冬鳥の写真 ……8

(注) 以下、今回の鳥データに個体数を入れたが、万博公園にいる鳥全数
と言うことではなく、たまたま探鳥会で観察された鳥の数であり、参考値
である。

しかし、興味深いデータとなったので、いろいろ集計に利用した。

主催 吹田野鳥の会 / [(財) 日本野鳥の会大阪支部]

協力 (独) 日本万国博覧会記念機構

1. 万博公園定例探鳥会（毎月第2土曜日定例）

05年1月8日

05年2月12日(万博探鳥会発足満20周年記念)

05年3月12日

今回報告する3回の探鳥会参加者数は**339名**であった。

万博公園探鳥会は昭和60年2月にスタートして以来、05年2月の定例探鳥会で満20年、そして3月までの探鳥会回数は259回で、延べ参加者数**21,817名**となった。

①05年1月～3月定例探鳥会で観察した鳥

	1/8	2/12	3/12	1月～3月計
種数	41	44	37	48
個体数	501	418	316	1235

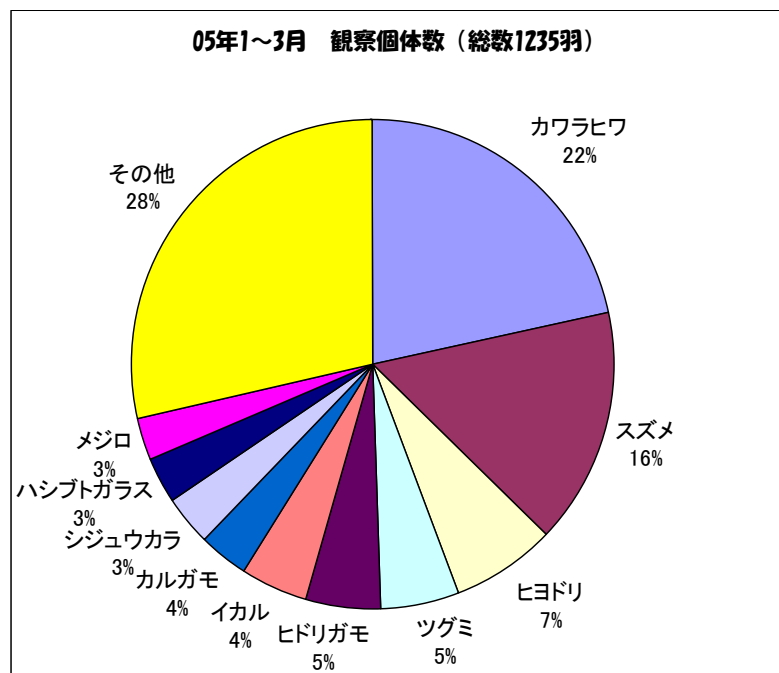
48種の内、3回の探鳥会でともに観察できた鳥 **36種**

また、2月の**44種**観察は、20年間での新記録

②観察個体数

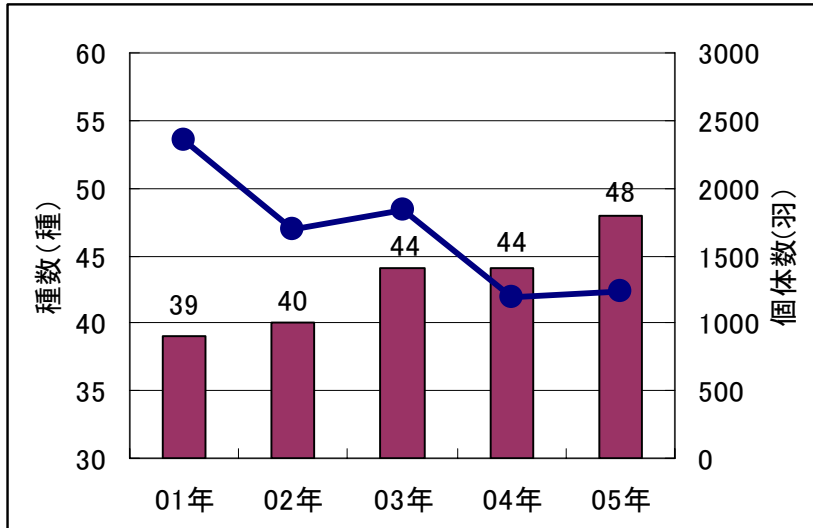
(主な種の比率)

カワラヒワ・スズメなど、冬の間大きな群で生活している小鳥の個体数が最も多く、ヒヨドリ・ツグミなどが続いている。



2. 01年～05年1～3月の結果

③各年1～3月探鳥会で観察した鳥



5年間で見ると種が増加し、個体数が減少したデータとなった。
(しかし、前述の通り個体数は概数であり、個体数が減少したとの結論は出ない。)

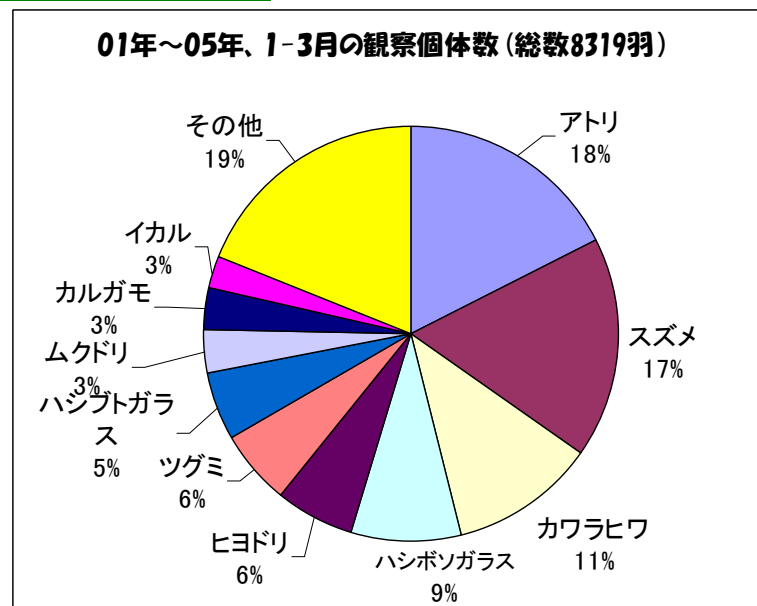
④各年1～3月の全探鳥会で観察した鳥(17種)

カルガモ	キジバト	コゲラ	ハクセキレイ	セグロセキレイ	ヒヨドリ
ジョウビタキ	シロハラ	ツグミ	シジュウカラ	メジロ	アオジ
アトリ	カワラヒワ	スズメ	ハシボソガラス	ハシブトガラス	

⑤各年1～3月の主な種別個体数

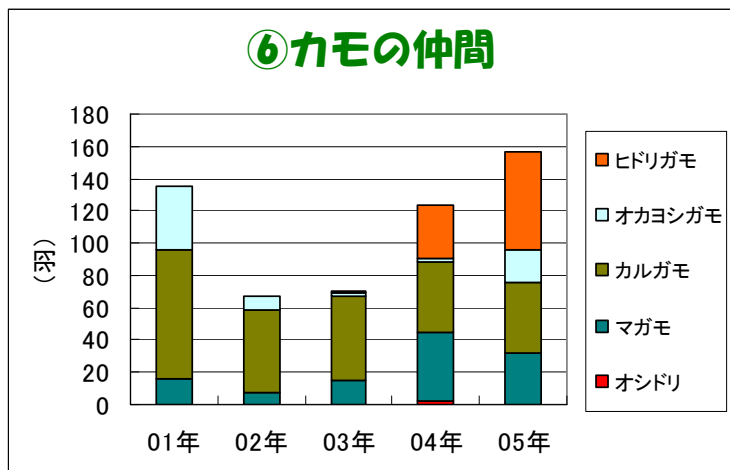
アトリの数が多いののは、01年に2月500羽を最高に、1月・3月合わせ3回で約1000羽の大群を観察したことによる。

この結果、上述のように01年の個体数が多かった、となった。



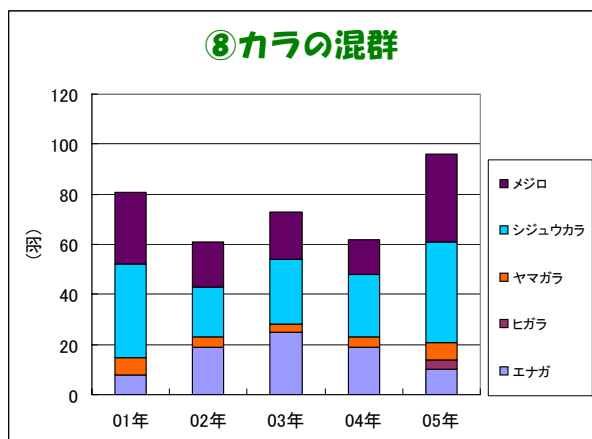
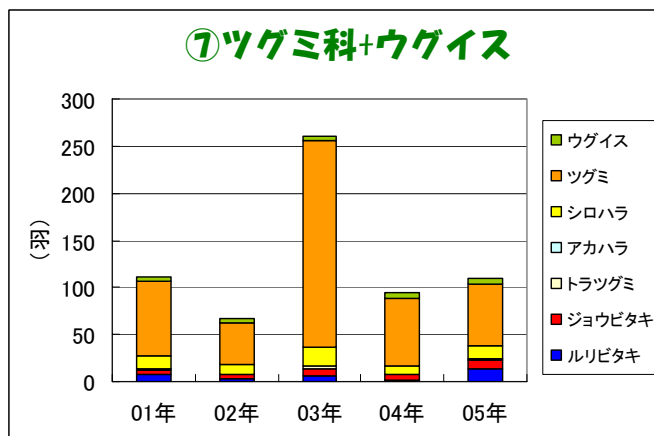
3. 01年～05年冬鳥の状況

冬鳥の状況について05年のデータのみではわかりにくいので、この5年間のデータを比較しながら考察した。



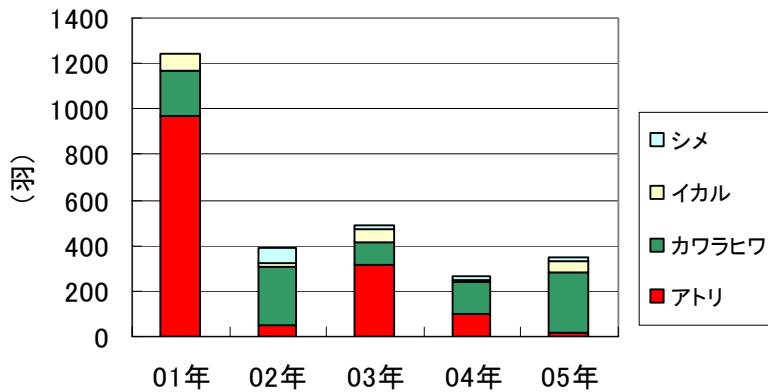
01年はオカヨシガモが多かったが、ここ2年はヒドリガモが増えている。ヒドリガモは陸上に上がって草を食べる種なので、万博の池は周りの芝生に草があり住みやすい筈である。マガモも多くなっているが、留鳥のカルガモはほぼ同数が観察されている。

03年1月にツグミ100羽カウントされたことで、ピークがでた形となった。しかし、探鳥会のコースが一定しているわけでない他の年より多かったと断定はできない。トラツグミの観察は03年のみであるが、探鳥会以外では毎年観察されている。冬のアカハラ観察は単発的で、この間では01・02年に各1羽観察されたのみである。またウグイスが予想外に少ない理由は不明である。



エナガ・シジュウカラを中心とする群は「カラの混群」と呼ばれ、冬の里山の象徴的な小鳥群で、左記の鳥のほかに、コゲラも一緒に行動している。尚、05年は久しぶりにヒガラを観察した。

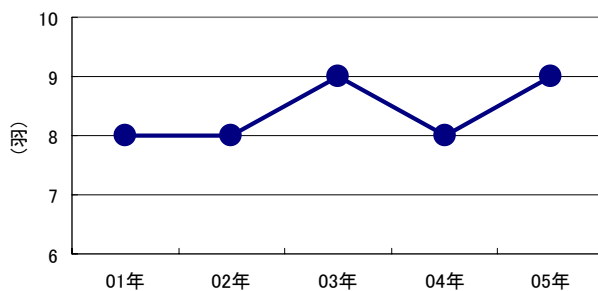
⑨アトリ科の鳥



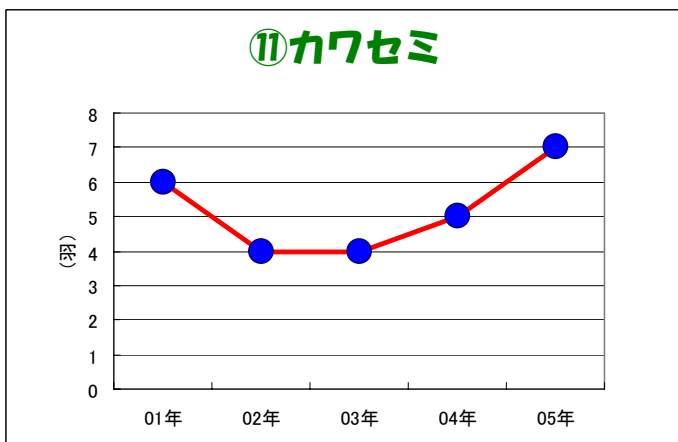
左図のように、01年にはアトリが大群で観察され、全体データにも大きく影響している。05年のアトリは、数10羽いるが探鳥会での観察数が少ない。

アオバトは、万博の森にアラカシ・シラカシなど常緑樹が成長したことで増加している鳥の一つである。探鳥会ではないが04年3月に数10羽の群が確認されており、毎冬同程度のアオバトが越冬していると推定される。右図の探鳥会データでそれほど多くないのは、アオバトが緑陰を好む鳥で、上空を飛んだときのみ見つかるケースが多いためである。

⑩アオバト

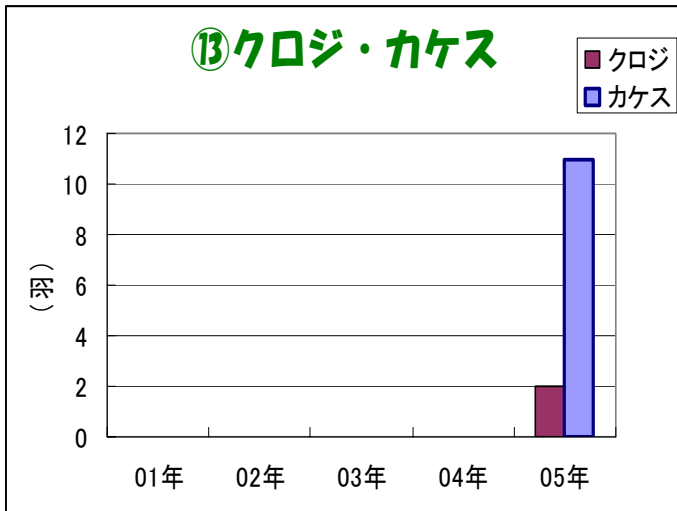
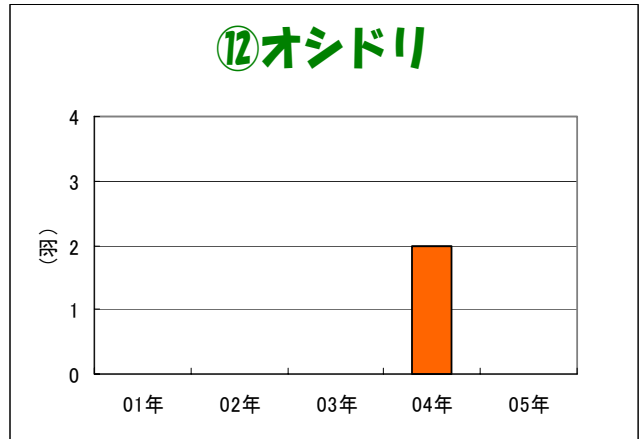


⑪カワセミ



1年中観察できる留鳥のカワセミは、美しい姿をほぼ毎回観察できるので、探鳥会参加者の楽しみになっている鳥である。園内に営業場所があれば繁殖すると思われる。最近各地で、繁殖場所を人工的に設置することが試みられているので、万博公園においても検討して頂きたいと思っている。

オシドリ観察は探鳥会ではこの5年間に1回2羽のみであるが、多数のオシドリが万博公園に来ていることは間違いない。公園北側の茨木ゴルフ場の池には毎年数100羽のオシドリが越冬(05.1のカモ調査で374羽確認)している。このオシドリの餌場が万博公園で、朝夕、そして休園日など園内に人気のないとき来て、ドングリを食べていると推定される。



クロジ……探鳥会では今年初めて観察した鳥である。ホオジロの仲間で薄暗い林床にいることが多いので、なかなか見つけにくい鳥である。

カケス……久しぶりに観察できた鳥。04年秋、クマの出没でわかるように山地はコナラなどのドングリが不作であった。カケスはアラカシなどドングリを求め、公園に下りてきたと推定している。

⑭04年～05年の冬鳥

今冬は大阪近郊にジョウビタキ・シロハラなどの冬鳥が多く観察され、そのためもあってか2月の万博探鳥会では探鳥会開始以来の44種もの鳥が観察できた。この原因として

- ①04年夏の極東地域(日本の中北部～サハリン、ロシア東部など)において、繁殖期の5～7月のお天気が良く、繁殖率が良かったこと
- ②寒い冬となり、日本海側では積雪が多いため、小鳥たちは積雪が無くえさの取りやすい太平洋側に移動していたこと

が推定される。しかし、後述のように木の実がなくなり個体数が大幅に減少してしまった。

4. 木の実(液果)と鳥の関係について

今シーズンは秋の渡り鳥が多かったこともあって、大阪近郊では久しぶりに冬鳥の多いシーズンになることが期待された。実際に冬鳥が多く来ていたと推定され、木の実(液果)が小鳥に食べつくされて無くなる時期が例年よりずっと早く、木の実がなくなると同時に新しい餌場を求めて移動したようで、鳥の種数は多いものの、個体数はそれほど多くないという経緯をたどった。

冬に熟する主な木の実(液果)が鳥に食べつくされる順番は、クスノキ→トウネズミモチ→ピラカンサ→クロガネモチ・サンシュユの順と推定され、クロガネモチ・サンシュユは3月まで残ることの多い木の実であるが、今年は1月中に消化されていた。

万博公園で木の実と冬鳥の個体数を見る指標木として、日本庭園入口左側にあるクロガネモチの木の実に注目してきた。定性的ではあるがクロガネモチの実が残っている時期と、液果の好きな鳥の個体数に相関性があると思われたからである。

クロガネモチの実が1月の探鳥会で無くなっている……鳥が非常に多い年

2月の ” ……鳥が普通(～やや多い)の年

3月の ” ……鳥が少ない年

3月の探鳥会でも残っている ……鳥が非常に少ない年

今年、そのクロガネモチの木は1月の探鳥会では実は残っていたが大分少なくなっていて、1月下旬に無くなった。

たまたま05/3/30に「種子散布研究会」という学会を聴講したが、参加者にこのことを質問した結果、今年は万博・大阪近郊のみでなく全国的に木の実が無くなっている月日の早いことが確認された。

また、1995～96年冬は全国的に冬鳥激減した年であった。このクロガネモチの実はそのまま食べられずに残り、96年8月頃になっても腐らずその年の青い実と一緒に生って共存していた。96～97年冬は鳥が多い年となったことから、冬には2年分のクロガネモチの木の実が食べつくされたことを確認している。

5. 万博公園の冬の鳥



アオサギ



アオジ



アオバト



アカゲラ



アカハラ



アトリ



イカル



イカルチドリ



ウグイス



エナガ



オカヨシガモ



オシドリ



カイツブリ



カケス



カワウ



カワセミ



カワラヒワ



キセキレイ



コゲラ



コサギ



シメ



ジョウビタキ



シロハラ



スズメ



セグロセキレイ



ツグミ



ハクセキレイ



ハヤブサ



バン



ヒヨドリ



ビンスイ



モズ



ヤマガラ



ルリビタキ

以上